

# 5. 「京都の歴史を歩こう！西陣編」 実施報告

篠原 光

## 1. はじめに

2019年11月10日に、京都府立京都学・歴史館主催「京都の歴史を歩こう！西陣編」が開催された。この遠足は、企画の段階から歴史学科の学生が有志で文化や歴史を生かした活動を実施している「文化遺産デザイン研修」が主体となって運営しており、府民を対象に参加者を募集して、選定地域を実際に歩きながら解説をおこない、その地域の歴史や魅力を伝えるものである。なお、本年度の参加学生は以下の通りである。

安部萌花 薄麻里奈 川西優帆 小島千幸 篠原光 正瑞千幸 鈴木更紗 鈴木美命  
富永有貴江 長谷川巴南 宮田匡 守田悠 山出歩 吉田祐太 吉永健人

## 2. 事前調査

まずは歴史学科有志の学生によっておこなわれた遠足当日までの活動について述べる。

1～3月 1月にメンバーの募集があり、2月に1・2回生（当時）のメンバーの顔合わせをおこなうとともに、各自遠足候補地をプレゼンし、今年の遠足地を西陣に決定した。その際に、メンバーを古代・中世、近世、近現代、総括の4つの班に分割した。

4～9月 4月3日に新2・3回生のメンバーで現地を巡検し、その後、問題点や1年間のおおまかな予定を検討した。

4月21日にはデザイン研修への勧誘も兼ねて、新入生を対象に昨年度の遠足開催地である粟田口にて新入生歓迎遠足をおこなった。その後のデザイン研修の説明会を経て、4月末から新たに1回生の有志を従来の班に取り込んだ。また、それぞれの班が文献や史料を用いて西陣の各時代の出来事やそれに関する見学先を調べ、その内容を毎週報告書にして提出し、週に一度メンバーで集まって内容に関する討論をおこなった。

6月23日には、西陣の町家で西陣の歴史や魅力を伝える活動をおこなっておられる方や西陣の伝統文化祭やまち歩きに長年関わっておられる方に聞き取り調査を実施した。

8月11日には京都府立大学の学生だけではなく、他大学の先生や学生も募集して巡検をおこない、この際にデザイン研修の遠足で初めてマイクを使用した。終了後に頂いた意見をもとにして、テーマを「再生（リボーン）」とすることに決定した。

10～11月 10月は11月の遠足本番に向けて、参加者の方に配布する資料や小道具の作成・マイクの練習・解説の順番や原稿の精査をおこない、11月10日に遠足の本番を迎えることとなった。

このほかに文化遺産デザイン研修では、昨年度に引き続き「れきしんぶん」を発行した。これは学内での歴史学科の先生や学生の活動を学内・学外にむけて発信するものである。今後も継続して発行していくことが望まれる。

### 3. 遠足当日

次に、遠足当日の流れと今年度の反省点について述べる。

**出発** 当日、学生が午前9時半に西陣織会館正面入り口付近に集合して参加者15名の受付を開始し、名札・地図・クリップボード・トランシーバーを渡した。その後、受付を終えた方から順に学生1人と参加者1～2人からなるグループをつくった。今回の遠足では、道幅が狭く大人数での行動は危険であると判断し、あらかじめ先発班と後発班の2班に分けた。午前10時頃に参加者全員が集合し、学生代表からの挨拶、遠足のテーマや注意事項の説明、西陣織の起源に関する解説がおこなわれ、遠足が開始された。先発班は説明終了後すぐに出発し、後発班は10分程西陣織会館内部を見学したのち出発した。

**西陣織会館・山名宗全邸跡** 遠足を始める前に、西陣織会館前で西陣が西陣と呼ばれる以前の古代において、織物業がどのように律令国家に統制されていたかなどについての解説をおこなった（写真1）。次の目的地までの道中では、参加者の方と雑談で打ち解ける時間とした。

山名宗全邸跡では、応仁の乱によって「西陣」という名称が生まれたことや荒廃した土地から織物業を再開していく歴史を説明した。次の目的地までは、応仁の乱後の西陣の様子やライバル業者との争い、西陣によくみられる辻子や町家、聚楽第を由来とする町名や秀吉による西陣織の保護政策について、個別で解説をおこなった。

**千両ヶ辻・本隆寺・紋屋町** ブラタモリ西陣編でも紹介された老舗の織物業者である木村卯兵衛株式会社の前で、千両ヶ辻（現在の今出川大宮）についての解説をした（写真2）。ここでは、近世中期以降に生糸問屋が集住して膨大な生糸の取引がおこなわれたことで西陣織の中心地となり、近代においては大手銀行が集中していたことを当時の地図で示しながら話した。次の目的地までは、織機技術の向上のため、フランスの技術や織機を導入したことなどを各自で話した。

本隆寺では、同寺が西陣焼や天明の大火で西陣が焼け野原となったにもかかわらず全焼を免



写真1 西陣織会館前にて



写真2 西陣の由来を語る



写真3 京都市考古資料館前の石碑をみる

れた「焼けずの寺」であることを解説した。ここで10分程の休憩をとったものの、堂内は改修工事中の所が多く、あまり観覧できなかった。次の目的地までは、西陣焼と天明の大火の際に幕府からの公的支援によって復興がなされたことを話した。

紋屋町では、江戸時代に西陣織業界の頂点に君臨していた御寮織物司の六家が集住していた町であることを解説した。また、御寮織物司の掟で実在したものを三つの選択肢から選ぶというクイズを実施したところ、投票数は見事に三つに分散した。

西陣中央小学校・京都市考古資料館 西陣中央小学校では、室戸台風による被害とその復興について解説した。西陣の人々は、今日に至るまで防災の日を設定し、その惨劇を忘れないようにしている。考古資料館までは、近代に集中

していた銀行の跡地や残存する金融機関を紹介しながら歩いた。

もとは西陣織物館であった京都市考古資料館では、西陣を襲った不況に対する織物業界の復興を目的として西陣織物館が建てられたことなどについて説明した(写真3)。またゴールの西陣織会館までは、西陣空襲や建物疎開についてそれぞれが話をした。

西陣織会館 ここでは、現在の西陣や西陣織業界についての解説をおこなった。現在、西陣織業界は衰退しており、西陣織が忘れられないためにも西陣をあげての伝統文化祭などを地域の方々が協力しておこなっているということを話した。

最後に学生代表による挨拶、アンケートや補足資料を配布し、解散となった。

#### 4. おわりに

今年度は夏季休暇を調査に費やさず前期の授業期間中に一通りの調査を終了させたことで、昨年度よりは時間に余裕があった。参加者にも恵まれ、一つの班に1回生から3回生を1人以上配属できたことで、非常に詳しく調べることができた。

しかし、やはり1回生は途中参加で、遠足の経験の有無もあってか、「先輩からいわれたことに従う」という体制が生じてしまっている。主催機関である京都府立京都学・歴彩館との連携不足も課題として挙げられよう。また、「文化遺産デザイン研修」と称してはいるものの、文化遺産学コース(地理学・建築史学・考古学・文化情報学)の専門的な知識や技術を活かした解説や、「まち」のとらえ方をあまり取り入れることができなかった。次年度から始まる新しい体制のもとでのデザイン研修に期待したい。